

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第十七回 ロシアという狼藉ろうぜき

日清戦争での勝利は、日本の苦難の近代史の始まりであった。世界最強の陸軍を擁して領土拡大への果てしもない野望をあらわにするロシアと戦い、これに勝利しなければ日本の生存が危うい、そういう状況が日清戦争後の極東アジアに生まれたのである。

日清講和条約の成立が明治二十八年（一八九五）

四月十七日、そのわずか一週間後に露仏独の強圧的な三国干渉により、講和条約によって日本に割譲されたばかりの遼東半島が清国に還付されることになった。三国干渉とはいえ主役はロシアであ

る。フランスは露仏同盟の締約国であるがゆえにロシアに引き込まれ、ドイツはロシアが極東において日本と事を構えればヨーロッパにおけるドイツ権益へのロシアの脅威が減じると考えて、三国干渉に加わったのである。主役はロシアであり、ロシアをかける方向に向かわせるのに重要な役割を演じたのが、大蔵大臣のウィットであった。

ウィットは半島還付の利害得失を精細に検討し、清国という「脆弱な国家」を隣国として保つことが東方におけるロシアの安全を保障する最良の策であるとの結論にいたった。そしてウィットは二

コライ二世に対して、「日本をして大陸に根幹を張り、遼東半島の様な或る場合には北京の死命を制するに足る地域を領有させることは、到底我々の容認しえない所である」と上奏、皇帝もこれに応じた(『ウィットテ伯回想記』大竹博吉監修、原書房)。

日清戦争の全過程を担った外務卿が陸奥宗光である。陸奥は日清戦争によって蕩尽した軍事力をもって三国と戦うことはかなわぬことを悟り、「兵力の後援なき外交は如何なる正理に根拠するも、その終極に至りて失敗を免れざることあり」と慨嘆した(『蹇蹇録』岩波書店)。

日清戦争での敗北により朝鮮に対する清国の影響力が衰える一方、ロシアの影響力が一段と大きなものとなっていった。朝鮮政府も遼東半島の還付を余儀なくされたことにより「日本恃むに足らず」とみるようになり、朝鮮政府の主勢力は親露派路線へとにわか傾いた。「事大主義」の対象が清国からロシアへと転じたのである。

ロシアはここぞとばかりに朝鮮に攻勢をかけ、つ

いには朝鮮国王の高宗をロシア公使館に移し、国王はここから詔勅を発せざるを得なくなった(「露館播遷」)。日清戦争後、日本は親日派の金弘集を首班とする内閣を組成して日本主導の朝鮮改革を開始しようとしたものの、ロシアの強圧により朝鮮政府は金弘集を死刑に処し、屍を市街に晒すという残忍さをみせつけた。いかんともし難いロシアの狼藉であった。

ロシアは清国に対しても攻勢をつづけた。清国に還付された遼東半島の旅順、大連の租借を清国に迫ってこれに成功した。さらにロシアは対清交渉により敷設中のシベリア鉄道路線を清国領土内の蒙古、北満州を経由してウラジオストクに直結させれば距離を一気に短縮できるとみて、この要求を清国に突きつけた。ウィットテのこの要求提案にニコライ二世が乗り、皇帝はみずからの戴冠式に親露派の李鴻章を招待して丁重に遇して要求をのませた。この時に巨額の賄賂がウィットテから李に渡されたという噂があったが、回顧録ではこれを否定して

いる。

この時点で露清密約と呼ばれる三項目がウィットと李鴻章との会談で議論されたらしい。密約であるがゆえに後日になってもその成文は明らかになつていない。しかし、極東アジア情勢にかかわる資料を丹念に精査して書かれた『日支外交六十年史』（末廣重雄監修、建設社）という大著がある。著者は「天津大公報」の記者・王芸生である。この著作によれば、密約は三項目からなり、第一項目と第二項目は、シベリア鉄道建設用の清国領土内用地の譲渡ならびに敷設を認めたものだという。驚くべきは第三項目である。

「日本ガ清国ノ領土又ハ露国沿海州を攻侵スルトキハ相互ニ防御ノ責ヲ有ス」とうたわれたという。

ロシアは日本を仮想敵国とする密約を李鴻章にのませたのである。この項目について王芸生は「権を喪ひ国を辱め、而て徒に表面を粉飾するのは清国外交家の本領である」と憤激を隠さない。ロシアの国権主義外交の対象は、朝鮮、清国を経てさらに

日本にまで及ばんとしていた。ロシアは旅順、大連の租借のあと、東支鉄道の支線である南満州鉄道敷設の利権をも得た。

かくして日清戦争後の日本は、朝鮮半島におけるロシア優位を許し、清国においてもロシアによる租借利権と鉄道利権の獲得を余儀なくされ、日清戦争勝利の「戦利品」のことごとくが奪い去られていった。日清戦争には勝利したものの一段と強大な敵ロシアとの戦いももう眼前に迫ってきたのである。

一七二一年のピョートル一世の宣言に始まり、一九一七年の革命によりニコライ二世が退位させられるまでの期間が帝政ロシアであり、その領土はユーラシア大陸の北部を制する広大なものであった。帝政ロシアの後継が旧ソ連邦であったが、この高度に中央集権的な国家も一九八〇年代の最後半には東西冷戦に敗れて崩壊、十カ国を超える共和国からなる独立国家共同体となって今日にいたる。

プーチンのロシアによるいかにも酷いあのウクラ
イナ侵攻とは、帝政ロシアや旧ソ連邦への執念深い
回帰願望の表れに違いない。ソ連邦の崩壊によつて
独立した共和国はロシアから逃亡した不埒な者た
ちなのであろう。ロシアの立場からすれば、これら
の共和国は文字どおりの「失地」であり、軍事力を
もつてしてでもこれらを「回復」しなければ自分の
身の証が立てられないのであろう。ロシアになお残
る帝政ロシアや旧ソ連邦の大国意識は、逃げ去つ
た共和国の主権など許し得ないのである。独立し
た諸共和国は大国の尊厳に泥を塗つた許しがたい
国々であり、この耐え難いトラウマを克服しなけれ
ばみずからの専制的統治の正統性を証すことがで
きない。

大国化への貪欲な欲望は、現在の中国を衝き動
かしているものと随分と相似ている。アヘン戦争以
前の中国は周辺を睥睨する「天朝」であり、周辺諸
国は天朝への恭順を求められてきた。アメリカ主導
の世界秩序の変更を求めて米中関係を緊迫化さ

せ、なおウイグル族への人権抑圧、台湾統一、南シ
ナ海への暴力的進出、尖閣諸島侵犯の常態化など
が着々と進められている。天朝観念に由来する中
国人エリートの大國意識は、中国の歴史が生んだ
価値そのものである。ロシアも中国も、「喪失した
過去」を取り戻そうというやみ難い欲求に身を焼か
れている。

そしてこの欲求が野望となり、軍事的侵攻の時
期に入ったのである。ロシアと中国の大國主義は、
それぞれの歴史が生んだ価値と正統性に由来する
ものだと考えるならば、これと対峙することは容
易ではあるまい。両国を取り巻く民主主義国家の
一段と強い連携が求められるのはそれゆえであ
る。

わたなべとしお

一九二九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済
学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五
年、「成長のアジア 停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」
で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受
賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。